桂離宮庭園「桂垣」の基礎的調査

はじめに　文化財の中でも、歴史的庭園は、植物という生きた材料を使用する点が他の文化財と大きく異なる特徴である。庭園において植物は、主景、背景のほか、添え、遮蔽、誘導、仕切り、地被、生垣などとして使用される。用いられる植物はさまざまであるが、どのような種類の植物が使われる場合でも継続的な管理が欠かせず、そのためには基礎的なデータの蓄積が必要となる。

本稿では、庭園で使用される植物の中で日本の文化を象徴するタケについて、代表的な歴史的日本庭園である桂離宮庭園の竹生垣「桂垣」を具体的な対象として、2004年からおこなっている調査の基礎的な部分を報告する。

調査の目的　「桂垣」は桂離宮庭園の東側外周にある全長約250mにわたる竹の生垣で、背後の竹林に生えているハチクを生きたまま曲げて、枝葉を編み込みながら下地となる建仁寺垣に固定していくという手順でつくられる。これは折り曲げられた状態でも枯れないという竹の特性をうまく利用したものである（図32・33）。17世紀の終わり頃に描かれたとされる絵図『桂宮御別荘全図』には、竹生垣ではなく四つ目垣が描かれていることから、創建当初からのものではないようである。また、江戸時代の造園技術書『石組園生八重垣伝』に竹を使ったこのような生垣が「大裏垣　枝折り垣ともいふ」と記載されている[1]ことから、桂離宮のものがオリジナルではないと考えられる。しかし、規模が大きいことや、このような竹生垣が余所で見られなくなったことなどから、桂離宮のものが「本歌」として扱われるようになり、現在この形式の垣は「桂垣」と呼ばれている。

「桂垣」と、その背後のハチク林は一体的な景観を形成し、桂離宮庭園の重要な構成要素となっているが、生垣とハチク林のどちらに関しても学術的な調査が継続的におこなわれたことはない。そのため、生垣に使われているハチクも、林内のその他のハチクも定量的に把握されておらず、過去の補修や改修の際には生垣にするハチクが不足して外部から大量に移植しなければならないこともあった。必要となる労力や活着のことを考えると、大量の移植は避けたほうがよく、そのためにはまず、桂離宮の「桂垣」には、どのくらいの大きさのタケがどのくらいの量使われているのかという基本的な情報について把握する必要がある。また、生垣に使われていない林内のハチクに関しても同様に、サイズ構成や量を把握することが不可欠である。

そこで本調査では、生垣のハチクと林内にあるその他のハチクの双方について、数量とサイズ構成を調べた。

調査対象種　ハチクは、マダケ属の大型のタケで、高さ18～20m、直径8～10cmに達する[2]とされている。その成長は出筍後3カ月前後で止まり、それ以後は伸びることも太くなることもない[3]。

調査地と調査方法　調査地は、京都市西郊に位置する桂離宮（北緯34°59′、東経135°42′、標高約20m）の東辺部分に位置する面積約0.3haのハチク林である。京都市西郊は暖温帯常緑広葉樹林の植生帯に属し、桂離宮から約4kmの距離にある京都気象台（北緯35°00′、東経135°43′、標高約41m）で観測された1995～2004年の年平均気温は16.1℃、平均年降水量は1495.7mmである[4]。

図32　「桂垣」（表側）

図33　「桂垣」（裏側）

ハチク林は斜面部（傾斜度約21～34°）と平坦部からなり、斜面部は北西から南南東に逆「くの字」形に曲がっている。調査地全体は砂質土で覆われており、約253mにわたる東側林縁部には、ムクノキ・エノキ・ケヤキなどの落葉広葉樹（胸高直径約20～90㎝）が19本、モチノキなどの常緑広葉樹（胸高直径約40～50㎝）が２本あるが、林内の植生はハチクのみである。

本調査地は管理されている竹林であり、宮内庁京都事務所によると、通常の維持管理として、枯れたタケの伐採（不定期）、新しく出たタケノコの間引き（５～６月の出筍期）などがおこなわれている。垣については、10年に一度程度下地となる建仁寺垣の作り替えを含む全面的な改修がおこなわれ、３～４年に一度程度枯れたタケの交換などの部分的な補修がおこなわれる。

前回全面的な改修がおこなわれたのは2001年１～３月であり、その後は調査時まで補修はおこなわれていない。

調査にあたっては、2004年９月に林内のハチクについてナンバリングをおこない、その後胸高直径を計測した。

結果と考察　生垣に使用されているハチクのうち、もっとも細いものの胸高直径が1.7㎝であったことから、調査地内のハチクのうち、胸高直径が1.0㎝以上のものを対象に分析をおこなった。

垣に使用されているハチクの総数は815本、使用されていないハチクは3041本であった。

胸高直径に関しては、地際から130㎝の部分が割れているなどの理由で計測が不可能な24本（垣に使用されているもの23本、使用されていないのもの１本）を除いて計測をおこない、その平均値を求めた。垣に使用されているハチクは4.3㎝、使用されていないハチクは5.0㎝であった。さらに細かく見ると、生垣に使用されているハチクの中では、３～４㎝台の細めのものが約65％を占めた（表４）。生垣に使われていないハチクでは、３～４㎝台のものの割合は約40％であることから、生垣のハチクのほうが、林内にあるその他のハチクより細い傾向があることが示唆された。この理由としては、細い方が細工や施工をしやすいことが考えられる。「桂垣」を施工する際は、鉈で裂け目を入れてから折り曲げるか、あるいは裂け目を入れずに直接折り曲げるため、高さが高くなるほど作業が大変になる。細いハチクは高さも低く、高いものに比べて仕立てやすいことが、細めのものが使われる割合が高いことの背景にあると考えられる。ただし、細いものは高さも低いため、２㎝台では長さが足りない場合もあり、施工しやすく適度な高さもある３～４㎝台の太さのものが多く使用されたものと推察された。

表４　胸高直径の度数分布表

胸高直径（㎝）	使用	非使用
1.0～1.9	10	40
2.0～2.9	70	201
3.0～3.9	281	529
4.0～4.9	232	711
5.0～5.9	128	699
6.0～6.9	57	518
7.0～7.9	20	259
8.0～8.9	3	79
9.0～9.9	0	4
合　計	792	3040

「使用」は生垣に使われているタケを、「非使用」は使われていないタケを表す

施工のしやすさという面を考えると、今後は補修や改修の数年前から、胸高直径が３～４㎝台の細めのタケを選択的に残すことを考慮した方がよいかもしれない。ただし、その場合も太いタケを全て伐採してしまうのは避けほうがよい。太いタケノコは太いタケの地下茎から出る[3]ので、細いものばかりにしてしまうと竹林全体が弱体化する恐れがあるからである。旺盛にタケノコを出す太いタケも「親竹」として残して、竹林全体の健全な維持を考えていく必要がある。

まとめ　「桂垣」に使用されているハチクは細めのものが多いが、それは施工面でのしやすさが理由であると推察された。今後は、太いハチクと細いハチクの両方を活かした、バランスのとれた竹林管理をおこなっていく必要がある。

（青木達司）

引用文献

１）上原敬二『石組園生八重垣伝解説』加島書店、1984。
２）鈴木貞夫『日本タケ科植物総目録』学習研究社、1978。
３）上田弘一郎・吉川勝好『竹庭と竹・笹』ワールドグリーン出版、1988。
４）気象庁『気象庁ホームページ』http://www.jma.go.jp/jma/ menu/obsmenu.html、2011年３月現在。